

イ ソ ラ

ISOLA

ベルソナ
十三番目の人格

貴志 祐介



イノシム

十

三

番

の

ベルソナ
人格

貴志祐介（きし ゆうすけ）

1959年大阪生まれ。京都大学経済学部卒。生命保険会社に勤務した後、フリーになる。

1996年、「ISOLA」が第3回日本ホラー小説大賞長編賞佳作となり、「十三番目の人格——ISOLA——」と改題し、角川ホラー文庫より刊行される。翌年「黒い家」で第4回日本ホラー小説大賞を受賞。各方面から高い評価を得、大ベストセラーとなった同作は、99年11月映画公開される。受賞後、第一作「天使の囁き」で揺るぎない地位を確立する。他に「クリムゾンの迷宮」（角川ホラー文庫）「青の炎」がある。

イ ソ ラ ベルソナ
I S O L A —— 十三番目の人格 ——

1999年12月25日 初版発行

著 者——貴志祐介

発行者——角川歴彦

発行所——株式会社角川書店



〒102-8177 東京都千代田区富士見2-13-3

振替 00130-9-195208

Phone：営業部▶03-3238-8521

：編集部▶03-3238-8451

印刷所——暁印刷

製本所——株式会社鈴木製本所

落丁・乱丁本はご面倒でも小社営業部受注センター読者係宛にお送りください。送料は小社負担でお取り替えいたします。

©Yusuke Kishi 1996 Printed in Japan

ISBN4-04-873205-6 C0093

¥1500

I^イ
S^ソ
O^ラ
L
A
——十三番目の^{ベルソナ}人格——

装
丁／柴田淳デザイン室

靴底に触れる路面までが、非日常の感触を伝えていた。

足下には、ところどころに亀裂^{ひび}が走り、大きく隆起したり陥没したりしている。見渡すと、アスファルトの道路全体が、大波のようにうねっていた。由香里は分厚いビブラム底のトレッキング・ブーツを履いてきたのだが、何の脈絡もない傾斜には、しばしば足を取られそうになった。

歩くのにさえ難渋する歩道で、鉄錆^{てつさび}の浮いた旧式の自転車^{自転車}が、よろめきながら由香里の脇をかすめていった。大きな荷台には、たくさんの水のペットボトルを入れた段ボール箱をくくりつけてある。乗っているのは七十歳は過ぎているであろう老人だった。異様にふらついているのは必ずしも路面のせいだけではなく、日頃自転車に乗りつけていないためだろう。

突然、老人が耳障りな音を立ててブレーキをかけた。重い荷物を積んだ自転車は、大きく傾いた。転倒するのではないかと、はらはらしながら見守っていると、前輪を九十度近く曲げて、何とか足をついて踏みとどまった。

真正面から、若い男の乗った二百五十ccのバイクが走ってきたのだった。車道が渋滞して走れない以上、歩道を走るのは当然の権利だと思っているようだ。モトクロスのようなヘルメットとオーバーオールという姿で、大きなリュックサックを背負っている。前を歩いている邪魔な歩行者に対しては、

苛^{いらだ}立たしげにエンジンを空ぶかしして威嚇^{いかく}する。

由香里は、バイクを避けるために歩道の端に寄らなければならなかった。だが、そこには、路面から弾^{はじ}き出されたコンクリートブロックがいくつも無造作に転がっていた。とても歩ける状態ではないので、しかたなくブロックの上に乗って、バイクが通り過ぎるのを待つ。バイクの男は、マスクで顔を隠した由香里には目もくれなかった。

バイクの通り過ぎたあとには、黄色い砂煙がたつた。液状化現象で吹き出した大量の泥が、今は乾燥して路面を覆っている。それが、風が吹いたり車が通ったりするたびに舞い上がるので、マスクは必需品だった。

再び歩き出してから、由香里は周囲を見回した。何日たっても、この光景には慣れそうもない。視野に入る建物はいえ、数軒に一軒の割合で無残に押し潰^{つぶ}されていた。たいていは古い木造の建築物だったが、バブル経済華やかなりし頃に建てられたと思われるようなベンシルビルディングが斜め四十五度に傾いている様子には、現実感覚を崩壊させるようなものがあった。

由香里は、初めて被災地入りして、無残に落橋しドミノのように倒れた阪神高速を間近で見た時の衝撃を思い出した。あれからもう、一週間がたつのか。

一九九五年二月十四日。今日は聖バレンタインの日ではないか？ 由香里は心の中で苦笑した。去年の今時分、何をしていたのかはつきりと思いつくことができた。朝早く出勤して、店のマネージャーたちの机の中に、手作りのチョコプレートを配っていたのだ。

今にして思えば、何とものどかで能天気な日々だった。手作りチョコとはいっても、市販の板チョコを、前の晩ほんの二時間ほど湯煎^{ゆせん}にかけ、型抜きしただけのものだったが。そんな他愛もないことで、いい年をしたおじさんたちが内心どれだけ喜ぶのかは、由香里のような人間にしかわからないこ

とだった。

目的地の西宮市内の病院へ近付くにつれて周囲の人間が多くなり、由香里は、頭にぼんやりとした鈍痛を感じた。

薬……。そうだ。ここへ来てからだから、薬も、ちょうど一週間のんでいないことになる。頭痛は当然のように、頻度と強さを増しつつあった。だが、今薬をのむわけにはいかなかった。塩酸クロルプロマジンの効果は絶大である。そうすることは、彼女の能力を封印してしまうことでもあるのだ。一時はあれほど憎んだ能力だったが、それが、今くらい必要とされている時はなかったのだ。

そして、今ほど、自分が無力だと思い知らされている時も。

「賀茂さんでしょ？ おはようさん！」

一瞬早く気配は感じていたが、声をかけられるのを待ってから、由香里は振り向いた。真つ赤なダウンジャケットにスキー帽、マスクという完全防備の姿で、小太りの中年女性が微笑^{ほほえ}んでいた。前に一、二度顔を合わせたことがある竹田和子という主婦だった。

「おはようございます」

由香里は、会釈した。

「朝早くから、ご苦労さんやわねえ。あなた、どこに泊まってるの？」

「梅田のビジネスホテルです」

「やったら、甲子園まで、阪神で通ってきてるんでしょ？ もっとゆっくりでもええのに」

和子は、由香里と並んで歩きながら、親しげに話しかけた。

「早く目が覚めちゃうんです。ホテルにいても、することもなし。竹田さんこそ、家事をなさりながらでしょうから、ほんとに大変ですよね」

「ゼーんぜん」

和子は、目の前で大きく手を振りながら言った。

「どうせ、水道もガスも出えへんでしょう。家事言うても、することないんよ。旦那が出勤してしまつたら、あとは暇やから……」

由香里は、竹田和子の家が地震で相当な被害を受けたことも、彼女がボランティアに参加するためにとだけが無理を重ねているかも、よく知っていたが、あえて何も言わなかった。

「でも、賀茂さんみたいな人がいてくれて、ほんま助かったわ。わたしら、みんな素人ばっかしでしょう？ 講習は受けたけど、ほんとのこと言うて、心理学のことなんかは、よくわからへんのよ」

由香里たちがボランティアとして働くようになったきっかけは、アメリカで災害後の心のケアを専門としているNGOである、全米被災者救援組織 (National Organization for Victim Assistance; NOVA) の講習会だった。

二月の初めに神戸YMCAの一室を借りて催された講習会の内容は、被災者の救援活動に従事している専門職やボランティアの人間に対して、心理的な外傷^{トラウマ}への対処の仕方を中心とするトレーニングやロールプレイングなどの実技指導と、トラウマが被災者に及ぼす長期的な影響の評価とアドバイスなどだった。

「それでいいんですよ。被災された方は、みなさん、ほんとにちょっとした人間のふれ合いに飢えてるんだと思うんです。だから、親身になって話を聞いてあげるだけで、慰められますよ」

「でも、あの、何たら言うたかな……デブリー……?」

「ディブリーフィング (Debriefing) っ。」

「そうそう。どういう意味やったかしら?」

「まあ、事後説明というか……。被災者に対して、災害の体験によるストレスが引き起こす心や体の変化を説明して、それが特別なことではなく、自然な反応であることを教えて安心させてあげることですね」

「そうそう。そのデブリーヤわ。心のケアの第一歩やって、講習で言ってたけど、わたしら、そんなこと、ようせんもの。ただ、世間話したり、仮設住宅の申し込み用紙を書いてあげたりくらいのことです」

和子は、好奇心にあふれた目を由香里に向けた。

「でも、賀茂さんは、若いのに心理学にもお詳しいし、たいしたもんやねえ。何か、そういう関係のお仕事でもしてはるの？」

突然、話題が自分のことに及んで、由香里はどきりとした。

「いいえ。ただ、昔から心理学に興味があったものだから。ほとんど、かじっただけのことなんです」

「でも、賀茂さんはすごいって、あちこちで評判よ。金曜グループの人から聞いたんやけど、最初は心理学の小難しい言葉を知ってるだけかと思ってたのに、人の気持ちを汲み取るのが天才的やって」
「それは……たまたまですよ」

まずい、と由香里は思った。噂になるというのは危険信号である。これまでの経験から言うと、それは、彼女が示した能力が常識で説明できる範疇はんちゆうから逸脱いつだつしかけていることを意味している。もう少し自制しなければ……。

金曜日ということであれば、おそらく噂になったのはあの一件以外にはなかった。四日前だ。それまで神戸を回っていて、初めて西宮市の避難所を訪れた時のことだった。由香里は、その時の情景を

思い出した。

海に近い巨大な体育館は、小規模な暖房はいくつか入っていたものの、容積が大きすぎるために、ほとんど効果はなかった。板張りの床は冷蔵庫のように冷えきっていて、靴下はだしで歩くのさえ辛いほどである。すしづめになった被災者たちは、その上に薄い毛布を重ねて敷くだけで寝泊まりしていた。

由香里たちボランティアは、その間を回っては、一人一人から話を聞いていくことにした。最初から心のケアのボランティアなどと言うと、必要以上に身構えられたり不快感を抱かれたりするケースが多かったのだ。由香里たちは『サポート・ボランティア』というふうになんか名づけることになっていた。初めのうちは、由香里の目には、虚脱状態にあるのは、むしろ若い年代の被災者たちであるように映った。七十代以上の高齢者の方が、はるかに平常心を保った、しっかりした受け答えをした。

何か辛いことはないかというボランティアたちの問いかけに対して、老人たちは異口同音に「戦争の時は、ほんまにこの世の生き地獄やった。それに比べたら、こんどの地震では、みなさんようしてくれるし、飢え死にする心配もない。たいしたことないです」と答えた。

だが、一時間も話さないうちに、そうやって静かに耐えている老人たちの心がすでに限界に近づいていることを、由香里は感じ始めていた。

たしかに、過去にもっと悲惨な境遇に耐えたという記憶があれば、現在の辛い状態を我慢するのに役立つかもしれない。だがそれは、しょせん一時しのぎにしかならない。

若者ならば、どんな困難に直面しても、豊富な心的エネルギーによって、それを克服していくことができるかもしれない。だが、老人の心からは、すでにそうしたバイタリティーは失われているのだ。

今後、不自由な避難生活が長引き、明日の展望が見えないストレスが蓄積するにつれ、老人たちの中から深刻な精神の危機に陥るものが続出することは、確実に予測できた。

すでに、由香里の目からは、静かに耐えている老人の何人かからは、ゆっくりと命の炎を燃やしつくし、死へと傾斜していく様子を見てとることができた。だが、由香里には、どうすることもできなかった。これが、この国の国民に対する扱い方なのだ。由香里は、ただ、自分の無力さを噛みしめているしかなかった。

由香里は、四、五人目に、一人の老人に声をかけた。七十代も後半だろうと思われる老人の様子は、由香里の注意を引いた。表情には生気が乏しく、まぶたには、チック症のような痙攣まで見られた。老人は、明らかに抑鬱状態にあり、夜もよく眠れないと由香里に訴えた。

深刻なPTSD (Post Traumatic Stress Disorder; 心的外傷後ストレス障害) が起きていることは、疑うすべもなかった。

老人の心は厚い氷に覆われている。由香里は、老人に話をさせることで、ゆっくりと氷を溶かそうと試みた。

「わしは、逃げてしもうたんや……」

老人の話は回りくどく、歯が欠けているために発音も不明瞭で、何度も堂々めぐりに陥ったが、大震災で住んでいた文化住宅が全壊したことはわかった。家財をすべて失い、飼っていた猫も行方からなくなったという。

由香里は、老人の話から、PTSDに特有の、『時間の拡張』『視野の狭窄』『身体遊離』といった兆候を観察することができた。たとえば、実際に地震が起きていたのは秒単位のできごとにすぎないが、老人の話を聞いていると、それが十分以上続いていたような錯覚を抱かされるのだ。

この上は、一刻も早く、精神科医か臨床心理士のカウンセリングが必要だと思った。

だが、どこかがおかしかった。どこかが釈然とせず、由香里は、専門家に任せることにして、老人の前から立ち去ることができなかった。

苦勞して同じ話を何度も聞いているうちに、しだいにその理由がわかってきた。老人はここ二十年ほどずっと、文化住宅で独り暮らしだったという。猫は老人よりも先に窓から逃げ出した。にもかかわらず、老人の態度からは、明らかな自責の念、いわゆる『生存者の罪悪感』が感じ取れたのだ。

なぜだ？ 誰か家族が生きて埋めになって死んだのなら、老人が自分を責める気持ちも分かるが、家にはほかに誰もいなかったのではないのか？

老人は、いったい誰に対して罪悪感を抱いているのだろうか？

由香里は、二時間以上床に座って、老人の話し相手になってやった。厚い氷にようやくひびが入ったのは、這い上がってくる冷気で、彼女の膝の感覚がほとんど失われた頃だった。

「わしは、逃げた。怖かったんや。何も考えるゆとりもなかった。もしあいつらに捕まったらと思うと……」

その瞬間、氷が大きく割れ、下から長い間眠っていた真っ赤な火口が姿を見せた。それは、今でも生々しい老人の心の傷口だった。由香里には、それだけ聞けば十分だった。老人がずっと語っていたのは、本当は地震のことではなかったのだ。

「誰でも怖ければ逃げるわ。どんな勇気のある人でも」
由香里は、老人の目を見ながら、そっとささやいた。

「戦争だったんだもの。誰でもみんな、自分が助かることだけで精一杯だったんでしょう？ 亡くなった戦友さんたちも、あなたのことを恨んだりはしていないわ。立場が逆だったら、あなたは助かつ

た人のことを恨むかしら？　せめて、一人でも助かって良かったって思ってるはずよ。だからもう、自分を責めちゃだめ」

老人は、充血した目で、じつと由香里を見つめた。ぽかんとしていた。やがて、由香里の言葉が静かに意識に浸透したのだろう、一筋、二筋と、涙が頬を伝った。

由香里は、老人を苦しめていたのは、いわゆるフラッシュバックと呼ばれる現象であることに気がついていた。阪神大震災という強烈な精神的外傷によって、それまで心の奥深く眠っていた、過去の別の精神的外傷が再燃したのである。この年代の人々の場合には、多くは、戦争にまつわる体験だった。

老人は、由香里の胸にすがって号泣した。被災者たちは、驚いてその様子を見ていた。ボランティアたちも集まってきたが、二人を遠巻きにするだけで、声をかけようとはしなかった。事情はわからないが、これまで誰にも心を開かなかった老人の心の琴線に、由香里がようやく触れるのに成功したのだ。そのことだけは、誰の目にも明らかだった。

その晩のボランティアのミーティングでも、由香里は、老人の心を苦しめていた体験について、詳しくは語らなかった。老人のプライバシーにかかわる問題だったし、自慢話のようにするのは気が引けたからだった。

自分のやっていることに、いったいどんな意味があるのだろうか？　由香里は、その晩ホテルに帰って一人になると、自問自答した。もしかすると、単なる自己満足にすぎないのではないのだろうか？　老人は、確かに一時的にカタルシスを得ることができた。だが、明日からは、再び、生活の再建という解答のない問題に直面しなくてはならないのだ。

しかし、それでも由香里は、少なくとも休暇が取れるかぎりには被災者の心のケアの手助けを続ける

決心を変えなかったし、賀茂由香里という二十歳そこその若いボランティアが、被災者の苦しみを見抜く抜群の共感能力をもっているという噂は、あまり接触のないはずの曜日の違うグループにまで広まることになったのだった。

由香里と竹田和子が連れ立って病院へ入ると、顔なじみのボランティア数名に会った。ほとんどが地元の主婦で、自身も大なり小なり被災者だった。

「あ。賀茂さん」

「賀茂さんやわ」

ボランティアの間では、もう噂は、かなり広まっているらしかった。由香里は必要以上に注目されるのは避けたかったのだが、隣にくっついてゐる竹田和子は、得意げに、むしろ由香里を見せびらかすようにした。正義感が強く心の暖かい女性ではあったが、そういうところは、やはり中年のおばさんそのものであり、由香里にとっては迷惑この上なかった。

由香里が和子と一緒に大部屋の入院患者を見舞おうとすると、青木なんとかさんという主婦のボランティアに声をかけられた。下の名前は思い出すことができない。

「賀茂さん。ちょっと見てほしい子がいるのよ。難しい子みたいなんで、わたしでは、とっても役不足で……」

「難しいって、どういう子なんですか？」

役不足という言葉の使い方が間違っていると思ったが、由香里はあえて指摘はしなかった。

「それが、高校生の女の子なんやけど、震災で頭を打って入院してるの。いくら話しかけても、通じへんのよ。家族も全然見舞いに来てないみたいやし、きっと何か事情があるんやと思うんやわ」

由香里はためらった。これ以上注目を浴びるようなことをしでかせば、彼女の秘密が一気に露呈しかねない。

「その子、ずっと、黙ったままなん？」

竹田和子が質問した。

「それが、その時々で、態度が全然違うんよ。もう三回ほど会ってるんやけど、三回とも別人みたいで。自分からは話さんでも、こっちの言うことは聞いてくれてるな。て思ったら、次の時には、頭から、わたしを小馬鹿にしたみたいな態度を取ったり」

青木なんとかさんは、ぶつぶつとこぼした。

「難しい年頃なんやわ。うちの子も、高校生くらいの時、そんなことあったわ」

竹田和子は、由香里に向き直って言った。

「賀茂さん。引き受けたげたら？ やっぱり、こういうことは才能のある人やないと」

由香里の返事を持たずに竹田和子が「どこの部屋？」などと聞いたので、由香里は、うやむやのうちに、その子と話することを承諾したことになってしまった。

少女が入院していたのは、外科病棟だった。六人部屋の外にあった名札では、彼女の名前は『森谷千尋』となっていた。由香里は、一番窓際のベッドに歩み寄った。昼間だというのに、カーテンですっかり回りを隠している。

「今日は。起きてるかしら？」

一瞬間があつて、カーテンの奥から声がした。

「……はい。どちらさんですか？」

「わたし、賀茂由香里っていいいます。青木さんから、あなたのお話を聞いてきたの。ちょっとお話で

きないかしら？」

ゆっくりとカーテンが引き開けられた。

ベッドの上に座っていたのは、小柄で、意外なくらい可愛らしい顔だちをした少女だった。問題児のようには見えないが、表情は暗く、元気がなかった。薄いブルーのパジャマを着て、髪を三つ編みにしてたらしめている。頭と左手に包帯を巻いているのが、痛々しかった。

「森谷千尋さんね？」

少女は、なぜか少し躊躇^{ちゅうちよ}してから、うなずいた。

「わたしね、サポート・ボランティアっていう仕事をしてるのよ。今度の地震で被災した人たちの間を回って、お話を聞いているの。もしかしたら、ちょっと、おしゃべりしない？」

「話って……？」

「ああ。ただのおしゃべりよ。一日中病院にいらるのは退屈でしょう？ 何でもいいから誰かと話をすれば、気も晴れるわよ」

千尋は黙っていたが、承諾とも受け取れる態度だった。由香里は、椅子を持って少女の枕元に行くと座った。

「毎日、何してるの？」

「別に。特にすることもないから……」

由香里は、千尋の枕元に目をやり、驚くほど物が少ないことに気がついた。震災で怪我をして入院したということだから、もう一か月近くになる。それだけ入院していれば、普段はあまり本を読まない人でも雑誌や文庫本がたまるもののに、枕元に見えるのは、古びた本が二冊きりだった。

それも、一冊は『新字源』——なんと漢和辞典だった。もう一冊は、上田秋成の『雨月物語・春雨